て、此世のほかのことまで思ひながされ、おもしろさも哀さも殘らぬをりなれ、すさまじきためしにいひおきけん、人の心あさ、よとて、みすまきあげさせ給、月ばくまなくさし出て、ひとつ色にみえわたされたるに、玄ほれたる前栽のかげこ、ろぐるしう、やり水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごきに、わらはべおろして、雪まろばしせさせ給、をかしげなるすがたかしらつきども、月にはべておほきやかになれたるが、さま〳〵のあこめみだれき、おびしどけなきとのゐすがたなまめいたるに、こよなうあまれるかみのすゑ、玄ろき庭には、ましてもてはやしたる、いとけざやかなり、ちいさきはわらはげて、よろこびはしるに、あふぎなどもおとして、うちとけがほをかしげなり、いとおほうまろばさむとふくつけがれど、えもおしうごかさでわぶめり、

〔狹衣二下〕源氏の宮の御方にも、つねよりはとく人々おきたるこゑして、よもすがらつもりたる雪見るなるべし、たゝずみ給ふまゝに、わた殿の戸より見とをし給へば、わかきさぶらひどものきたなげなき、色々の狩ぎぬさしぬきなど、きよげにて、五六人雪まろばしするを見るとて、とのゐすがたなるわらはべ、わかき人々など、出ゐたるすがた共、いづれとなくをかしげにて、ふまゝくをしきものをなどいへば、みすの内なる人、おなじくはふじの山にこそつくらめなどいへば、越の白やまにこそあめれといふ也、

〔榮花物語三十根合六〕うちは京極殿よりかたふたがりければ、宮のつかさに、玄はす二〇寛德年にわたらせ給に、雪のふりたるつとめて、一品の宮の女房、南殿などを出てみれば、雪はまことに花とまがひ、池のこほりはかゞみとみゆ、いはほにもはなさきいみじうをかし、御堂のかたをみれば、からゐのこ、ちしてみわたさる、庭のゆきはきえがたになりにけり、こずゑぞさかりとみゆる、

〔扶桑略記三十堀河〕寛治八年〇嘉保元年正月五日丁丑、終日大雪、深及二一尺、家如北山、數日不銷、